青年期女性の対象関係とアイデンティティ，および境界例心性との関連

山崎　恵莉菜[1]・岡本　祐子[1]

Relationship among object relation, identity, and borderline personality traits in adolescent women

Erina Yamazaki・Yuko Okamoto

This study examined the relationship among object relation, identity, and borderline personality traits in adolescent women. The results of Study 1 showed that the average borderline personality trait scale score for the youth who did not have object constancy was higher than that for the youth who had object constancy. Moreover, most of the youth who did not have object constancy also did not have a sense of ego and gender identity. The results of Study 2 showed that the parent–child relationship during childhood affected object relation, and object relation was related to the present personal relationship.

Key words:　Adolescent Women, Object Relation, Identity, Borderline Personality Traits

問題と目的

Blos (1967) は青年期を家族という絆から抜け出して社会の方へ関心を向け始める時期，つまり，親との依存的つながりから脱して個を確立していく時期であるとし，それを第二の分離‐個体化期と称した。親とは異なる自己を確立することを，Erikson(1950)はアイデンティティの確立という言葉で表現した。アイデンティティとは，過去・現在・未来にわたって自分は自分であるという感覚であり，そして，この感覚を周りの人にも認められていると自信を持って感じられ，外に示していけることである (Erikson，1968 岩瀬訳 1982)。また，生物学的にみれば青年期は第二次性徴の発現から生殖能力の十分な成熟に達するまでの時期である。青年はおとなとしての肉体的能力や性的能力を培うとともに，自分にとって異質な性衝動を自己の一部として統制するために自我の発達に多くのエネルギーを費やさなければならない (Blos，1962 野沢訳 1971)。さらに社会学的にみると，自分が何になるべきかを模索しつつ社会の中で一定の役割を身に付け，やがて経済的自立を達成する時期であるといえる。このように，青年期は生物学的成熟と心理的・社会的な発達をとげる極め

[1] 広島大学大学院教育学研究科

て重要な時期である。しかしそれだけに青年期は心身に大きな負担がかかりやすく，生物学的成熟と心理社会的発達の間にひずみが生じやすい (馬場・福島・小川・山中，1992)。そのため，青年にとって急激な社会参加は，自己のコントロールの逸脱を招き，喫煙，暴力行為，非行，売春，アルコールや薬物依存などの社会的逸脱行為に至る場合がある。また，親からの分離が見捨てられ不安を招き，親への強い愛情を否定的感情に変えることでこの不安から逃れようとするが，この否定的感情がかえって自己に向けられ，うつ状態へとつながる場合がある (Besser & Blatt，2007)。山本 (2010) も青年期では青年のパーソナリティ構造に変化がおき，このパーソナリティを再構造化するために一時的にパーソナリティが傷つきやすく不安定になりやすいと述べ，青年期が青年にとって重要な時期であるが故に，不安定な時期でもあることを示している。

そのような不安定な時期にある現代青年の心理的特徴として，葛藤を抱えられない，自分の感情に向き合うことや言語化の困難さ，心身症などの身体化や行動化，内に籠ることなどが言われている (苫米地，2006；下山，2006；村山，2002)。また，他者との対立の顕在化を恐れるために他者と関係が深まることを恐れて表面的な親密さや楽しさを求めたり，相手を傷つけないように細かな配慮を強迫的に行い，エネルギーを使い果たしてしまう対人関係が指摘されている (岡田，2012)。山竹 (2011) は，価値観が多様化している現代社会においては，本来の自分を抑制して対象に合わせた行動を取って対象から離れられない構造が作られやすく，見捨てられ不安を抱きやすくなっていると述べている。見捨てられ不安とは「ある対象に見捨てられることに関する過剰な不安」のことであり，現代でも境界性パーソナリティ障害 (以下，BPD と略記) を理解するための重要な概念である。

BPD は，見捨てられることを避けようとする努力や不安定な対人関係，自己像，感情などの不安定，及び著しい衝動性の広範な様式で，成人早期までに始まり，種々の状況で明らかになる本質的特徴を持つ障害である (DSM-Ⅳ)。田村・井上 (2005) は，青年期をアイデンティティ確立の時期と捉え“ある意味で第二の分離-個体化期と類似の心性を備える時期”と想定した。そして，青年期における自己像の有り様や他者との関係の両面において，葛藤的になりやすい危機的で混乱した不安定な状態を“境界例心性”と捉えることが可能だと述べ，非臨床群の青年においても，BPD と類似の特徴を呈することが多くなっていると報告した。ここでいう境界例心性とは，“一般青年にみられるサブクリニカルなレベルの不安定な心理” (江上，2013；古川・北山，2004；重松，2005) ではなく，“非臨床群の青年に一過的に体験される境界例に類似した心性” (田村・井上，2005) のことを指す。青年期境界例を提唱した Masterson (1972 成田・笠原訳 1979) は，青年期の始めには分離個体化の時期に起きた自己表象と対象表象の分化過程が繰り返されるため，境界例様態を示す患者の中にも，病理ではなく発達上の揺れとして症状を呈する人たちがいることを示した。また Erikson (1959，1968) は，青年期ではアイデンティティの探求の最中に精神病や境界例のような様態を示す青年も珍しくないことを示し，病理的な様態を示す人たちの中には青年期で発達上の揺れが生じる者も存在すること見出した。対象関係論を自我心理学の視点からまとめた Jacobson (1964 伊藤訳 1981) においても，自己表象と対象表象が発達早期のようであったとしても，自我機能をみたときには発達的に高次の機能が動いている場合には，青年は病理を示しているのではなく，発達的揺れ

を体験している可能性があることが示されている。このように，青年の臨床像に一見して病理的側面が見受けられるときでも，それが本当に病理なのか，発達上の揺れとして表出されているのか査定することは，臨床現場において必要なことであるといえる。その査定基準の一助として，対象関係の視点が挙げられる。対象関係とは“対人場面における個人の態度や行動を規定する，精神内界における自己と対象 (他者) との関係性の表象” (井梅・平井・青木・馬場，2006) のことである。青年期の課題であるアイデンティティ形成のプロセスは，自己表象を明確で納得のいくものにするプロセスであり，そのために内的・外的な他者との関係性の視点が必要となる (熊野，2012)。上記のような青年期の心性も，対人スキルの未熟さの他，自己中心性や自他境界の未分化，見捨てられ不安，信頼感の欠如などが存在すると考えられ，いずれも対象関係の歪みという視点で捉えられる (井梅，平井，青木，馬場，2006)。

青年期は，アイデンティティの確立とともに，心理-社会的なアイデンティティに性愛性の側面を加えた性的同一性の確立も重要な発達課題である (小谷，2010)。人格変化を追求する心理療法の世界では，男性性，女性性の成長・成熟が，この人格成熟の中軸となるという仮説は棄却されることなく，大きく確認されている (小谷，2010)。つまり，性的同一性の成熟・確立が青年期におけるアイデンティティの確立に大きく関わっており，この性的同一性に目を向ける必要がある。しかし，青年のアイデンティティに焦点を当てた研究は多くなされているが，性的同一性について焦点を当てた研究はあまり行なわれていない。

また，境界例心性は特に女性に多く (古川・北山，2004)，摂食障害の増加や自傷行為，性的逸脱などの問題行動が指摘されている (山本，2010)。また，Erikson (1968 岩瀬訳 1982) もアイデンティティが確立されていない青年は親密な対人関係をもつことを避けたり，真の融合や真の自己放棄を伴わない性倒錯的な行為に至ってしまうと述べている。このような問題行動は性的同一性が未熟であるが故に生じる臨床的問題であるといえ，青年期女性の性的同一性の在り様を検討することが大切であるといえる。性的同一性とは，基本的な性別意識が獲得された後で精錬される，個人が女性として，男性として持っている個性や内的体験，感覚の統一性・一貫性・持続性であり，その感覚を楽しんだり，その感覚に誇りを持ち，外に示していけることである (鑪・山本・宮下，1995)。青年は外的な両親と内的な両親，つまり内的対象としての両親との力学を通してアイデンティティ感覚を養っていき，重要な他者は発達段階ごとに変化していく (井梅・平井・青木・馬場，2006)。対象関係に問題がある人は同じ対人パターンを繰り返すことが多い。そのため，個人が重要他者とどのような関係にあるかという対象関係の視点は心理臨床の診断や介入においても，まず注目されるべき点である (井梅・平井・青木・馬場，2006)。境界例心性を抱きやすい青年期では，対人関係においても問題が表出することが多いと思われるが，対象関係とアイデンティティとの関連を検討した研究は少ない。よって，本研究では以下の 2 つを目的として行なった。

本研究の目的

本研究では，女子青年の対象関係のあり方とアイデンティティ，および青年期心性としての境界例心性との関連を検討し (研究 1)，対象関係の基盤となる親子関係，現在の対人関係，および女性としての自己意識の質的な特徴を検討する (研究 2)。

研究 1

目的

女子青年の対象関係のあり方とアイデンティティ，および青年期心性としての境界例心性との関連を検討する。

方法

1.　調査対象者及び調査時期　A 大学学生，および B 大学学生 373 名 (男性 154 名，女性 219 名，平均年齢 20.87 歳，*SD*±2.36)を対象に，自記式目録調査を集団法，縁故法，スノーボール法で実施した。調査時期は 2014 年 6 月から 7 月であった。

2.　調査内容　(a) フェイスシート：学年，性別，年齢。(b) 青年期用対象関係尺度 (井梅・平井・青木・馬場，2006)。「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」の 5 因子からなり, 全 29 項目, 6 件法。(c) 対人関係における境界例心性尺度 (田村・井上，2005)。「嫌悪に対する概念」「孤立感」「関係断絶」「つながり希求」の 4 因子からなり，全 22 項目，4 件法。(d) 多次元自我同一性尺度 (MEIS) (谷，2001)。「自己の斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の 4 因子からなり，全 20 項目，7 件法。(e) ジェンダー・アイデンティティ尺度 (土肥，1996)。「異性との親密性」「自己の性の受容」「父母との同一化」の 3 因子からなり，全 30 項目，4 件法。

結果と考察

1.　各尺度の因子分析結果

(1) 青年期用対象関係尺度

因子分析 (主因子法，*promax* 回転) の結果，井梅・平井・青木・馬場 (2006) と同様，5 因子に分かれた。α係数は，「親和不全」で.82，「希薄な対人関係」で.75，「自己中心的な他者操作」で.76，「一体性の過剰希求」で.79，「見捨てられ不安」で.82，全体は.87 と十分な信頼性が確認された。

(2) 対人関係における境界例心性尺度

田村・井上 (2005) に基づき確認的因子分析を行い，因子負荷量が.40 以下となった項目を削除した。その結果，先行研究と同様に 3 因子が抽出され，適合度は GFI=.93，AGFI=.90，CFI=.94，RMSEA=.05 となった。また，α係数は「嫌悪に対する懸念」で.80，「孤立感」で.87，「関係断絶」で.70「つながり希求」で.77，全体としては.87 と十分な信頼性が確認された。

(3) 多次元自我同一性尺度

因子分析 (主因子法，*promax* 回転) の結果，谷 (2001) と同様に 4 因子に分かれた。α係数は「自己の斉一性・連続性」で.89，「対自的同一性」で.86，「対他的同一性」で.86，「心理社会的同一性」で.85，全体としては.92 と十分な信頼性が確認された。

(4) ジェンダー・アイデンティティ尺度

ジェンダー・アイデンティティ尺度は「性の受容」「父母との同一化」「異性との親密性」の 3 因子から成る。3 因子それぞれと尺度全体の信頼性を測ったところ，女性用尺度では，「異性との親密

性」において α=.48 と信頼性が低い結果となった。一方，男性用尺度では「父母との同一化」において α=.47 と信頼性が低い結果となった。そこで，*IT* 相関によって尺度全体との相関が.20 以下となった項目を削除した。さらに，土肥 (1996) に基づいて確認的因子分析を行い，因子負荷量が.40 以下となった項目を削除した。その結果，両尺度とも先行研究と同様の 3 因子となった。女性用尺度の適合度は GFI=.90，AGFI=.87，CFI=.94，RMSEA=.06 となり，α係数は「性の受容」で.83,「父母との同一化」で.86,「異性との親密性」で.62，全体が.91 と十分な信頼性が確認された。一方，男性用尺度の適合度は GFI=.90，AGFI=.85，CFI=.92，RMSEA=.08 となり，α係数は「性の受容」で.84,「父母との同一化」で.78,「異性との親密性」で.59，全体が.89 と十分な信頼性が確認された。

2.　性差の検討

性差の検定を行うために，青年期用対象関係尺度，多次元自我同一性尺度，対人関係における境界例心性尺度の 3 つの尺度について *t* 検定を行った。その結果，3 つの尺度全てにおいて有意差は認められなかった (Table 1)。対象関係尺度 (t = .46, df = 371, *n.s.*), 境界例心性尺度 (t = .13, df = 371, *n.s.*)，MEIS (t = -.07，df = 371，*n.s.*)。性差は認められなかったが，ジェンダー・アイデンティティ尺度の項目が男女別で構成されているため，女性を対象にして以下の分析を行った。

Table 1　各尺度における男女別の平均値と*SD*，および*t* 検定結果

	女性 (n =219)		男性 (n =154)		t 値
	M	*SD*	*M*	*SD*	
対象関係尺度	80.1	16.4	80.9	16.1	.46
境界例心性尺度	45.3	9.8	45.5	9.2	.13
MEIS	84.2	17.8	84.1	18.7	-.07

3.　青年期女性における対象関係様態の検討

対象関係の様態を検討するため，青年期用対象関係尺度各下位尺度 (「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」) について階層クラスタ分析 (Ward 法) を行った。各クラスタの人数比や解釈可能性を考慮した上で，5 クラスタを抽出した。クラスタ分析の結果を Figure 1 に示した。なお，図の縦軸は，0 を基準変数として標準化したものである。続いて，各クラスタの特徴を検討するために「親和不全」「自己中心的な他者操作」「希薄な対人関係」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」を従属変数とする分散分析を行った。その結果，全ての項目で有意差が認められたため，Tukey 法による多重比較を行った (Table 2)。

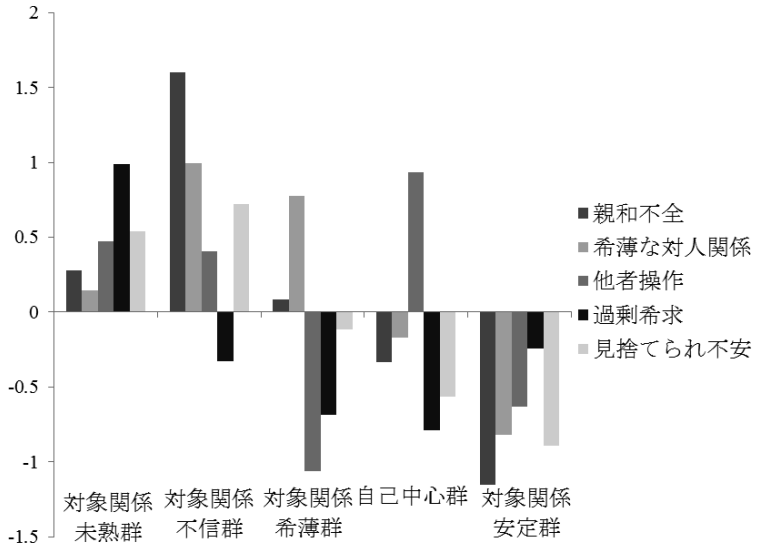

Figure 1　対象関係各下位尺度によるクラスタ分析結果

Table 2　各クラスタにおける対象関係下位尺度得点の分散分析結果

	1.対象関係未熟群 (*n* =76)	2.対象関係不信群 (*n* =22)	3.対象関係希薄群 (*n* =39)	4.自己中心群 (*n* =29)	5.対象関係安定群 (*n* =53)	*F* 値	多重比較 (Tukey法)
親和不全	20.1 (4.2)	27.6 (2.5)	19.0 (4.0)	16.6 (3.9)	11.9 (3.0)	81.17***	2>1,3,4>5 1>4
希薄な対人関係	10.8 (3.1)	13.6 (2.4)	12.9 (3.4)	9.8 (2.4)	7.7 (1.8)	29.57***	2,3>1,4>5
自己中心的な他者操作	14.7 (3.1)	14.5 (3.3)	8.5 (2.7)	16.6 (3.9)	10.3 (2.5)	49.81***	1,2,4>5>3 4>1
一体性の過剰希求	19.1 (3.7)	12.5 (3.4)	10.7 (3.6)	10.1 (3.1)	12.9 (4.4)	52.02***	1>2,3,4,5 5>3,4
見捨てられ不安	27.9 (4.4)	29.1 (5.6)	23.9 (6.5)	21.1 (3.8)	19.1 (4.7)	32.49***	1,2>3,4,5 3>5

( )は標準偏差を表わす　　***p < .001

Table 2 を参照し，各クラスタを命名した。各因子の特徴は，渡辺 (2011) が井梅ら (2006) をもとに作成した青年期用対象関係尺度の下位尺度の特徴を参照した。

第 1 クラスタは,「一体性の過剰希求」「自己中心的な他者操作」「見捨てられ不安」の高さに特徴づけられた。この群は，自他の境界が未分化で，自己優位的な視点にたち他者を操作的に利用しようとする傾向がある。その一方で, 他者の反応に過敏で見捨てられ不安を抱きやすいと考えられる。よって，この群を『対象関係未熟群』と命名した。第 2 クラスタは,「親和不全」「希薄な対人関係」「見捨てられ不安」の高さに特徴づけられた。この群は，他者の反応に敏感で見捨てられ不安を抱きやすく，他者と深く付き合うことを恐れ，安定した関係を持続的に保つことが難しいと考えられ

る。「親和不全」「希薄な対人関係」の共通点として相手との基本的信頼関係の築けなさが挙げられている (渡辺，2011)。よって，この群を『対象関係不信群』と命名した。

第 3 クラスタは,「希薄な対人関係」の高さ,「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」の低さに特徴づけられた。この群は，自他の分化はされており，相手の立場に立って考える共感性も発達している。しかし，他者との関係が希薄で，安定した関係を持続的に保つことができないと考えられる。よってこの群を『対象関係希薄群』とした。第 4 クラスタは,「自己中心的な他者操作」の高さ,「見捨てられ不安」「一体性の過剰希求」の低さに特徴づけられた。この群は，自己優位的な視点にたち他者を操作的に利用しようとするものの，他者を過剰に求めたり他者の反応を伺うなど見捨てられ不安は生じにくいと考えられる。よってこの群を『自己中心群』とした。第 5 クラスタは,「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「見捨てられ不安」の低さに特徴づけられ,「一体性の過剰希求」も低かった。この群は，他者と深く付き合うことに過度の不安を抱くことがなく，他者との関係性も維持できると考えられる。よってこの群を『対象関係安定群』とした。

4.　青年期女性におけるアイデンティティ様態の検討

自我アイデンティティは“個人の心理的側面における斉一性・連続性(自己アイデンティティ) ”と，社会の中で他者との相互交渉による相互浸透行為により自分の存在価値を確認する“社会的側面における斉一性と連続性 (心理社会的アイデンティティ) ”を包括したものである (Erikson, 1968 岩瀬訳，1982)。自分の内的な世界を一貫して持つことだけでなく，社会との関係の中での自分が位置付けられてこそ，自我アイデンティティは維持されていく (鑪，2002)。土肥 (1996，2011) はこの自我アイデンティティをジェンダーの場合に当てはめ，ジェンダー・アイデンティティを“自己の生物学的性を受容した上で作られる自分らしさ, 自我アイデンティティである”とした。そして，ジェンダー・アイデンティティは生物学的性に期待されたパーソナリティ，つまり，自己の性に基づく同一性を取り込んでいくだけでなく，青年期における自我アイデンティティの確立が進むとともに社会から期待され，自分に必要だと思うのであれば，同性性も異性性も自我アイデンティティに重要であることを認識して取り込むようになり，発達していくと述べた (土肥，2011)。このように自我アイデンティティとジェンダー・アイデンティティには関連があるといえる。MEIS は，Erikson の青年期における自我アイデンティティの定義に基づき，自己アイデンティティに関し，過去・現在を示す「自己斉一性・連続性」，未来への指向性を示す「対自的同一性」を分化，また，心理社会的同一性に関しては，他者と自己との関係を表わす「対他的同一性」，広く社会と自己の関係を表わす「心理社会的同一性」とを分けて自我アイデンティティを測定している。しかし，そこにジェンダーの概念は組み込まれていない。よって，青年期女性のアイデンティティの様態を検討するため, MEIS 得点とジェンダー・アイデンティティ尺度得点でクラスタ分析 (Ward 法) を行った。そして，各クラスタの人数比や解釈可能性を考慮した上で，4 クラスタを抽出した。クラスタ分析の結果を Figure 2 に示した。なお，図の縦軸は，0 を基準変数として標準化したものである。続いて，各クラスタの特徴を検討するために MEIS 得点，ジェンダー・アイデンティティ得点を従属変数とする分散分析を行った。その結果，全ての項目で有意差が認められたため Tukey 法の多重比較を行った (Table 3)。

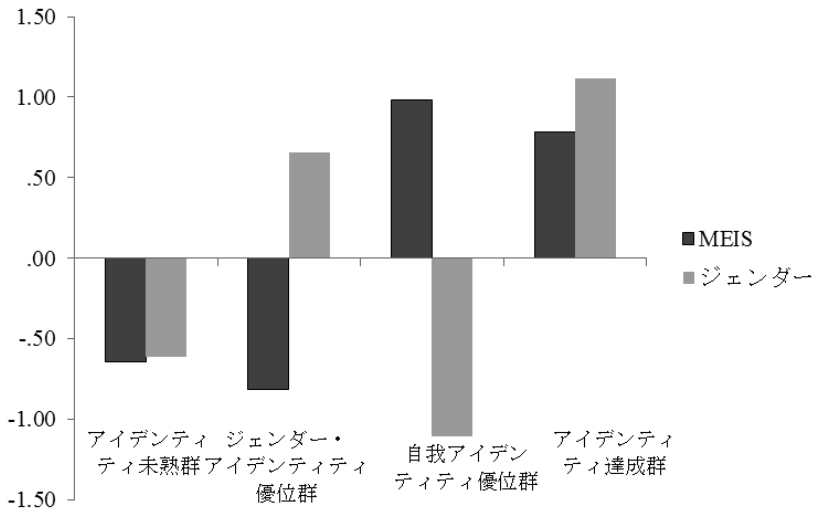

Figure 2　MEIS，ジェンダー・アイデンティティ尺度得点でのクラスタ分析結果

Table 3　各クラスタのMEIS，ジェンダー・アイデンティティ尺度得点の分散分析結果

	1. アイデンティティ未熟群 (n =74)	2. ジェンダー優位群 (n =46)	3. 自我優位群 (n =43)	4. アイデンティティ達成群 (n =56)	F 値	多重比較 (Tucky法)
MEIS	72.5	69.3	102.0	98.4	252.32^{***}	3 >1,2
	(11.7)	(7.8)	(9.6)	(11.6)		4 >1,2
ジェンダー	36.0	50.1	30.4	55.2	135.60^{***}	4>2>1>3
	(5.6)	(5.7)	(5.5)	(4.3)		

( )は標準偏差を表わす　　$^{***}p < .001$

Table3 を参照し，各クラスタを命名した。

第Ⅰクラスタは，MEIS 得点の低さ，ジェンダー・アイデンティティ得点の低さに特徴づけられた。この群は，青年期の課題である自我アイデンティティの確立も，ジェンダー・アイデンティティの確立もなされていない状態であり，両アイデンティティともに未熟であることが推察される。よって，この群を〈アイデンティティ未熟群〉と命名した。第Ⅱクラスタは，MEIS 得点の低さとジェンダー・アイデンティティ得点の高さに特徴づけられた。この群は，ジェンダー・アイデンティティの確立はなされているものの，自我アイデンティティの確立はまだなされていない状態であると推察される。よって，この群を〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉と命名した。この〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉のアイデンティティの様態は，同一性が拡散している状態においては，性的同一性の混乱が見られるとする Erikson の理論と異なる結果となった。

第Ⅲクラスタは，MEIS 得点は高いものの，ジェンダー・アイデンティティ得点は低いことが特徴的であった。青年期に築かれる自我アイデンティティの感覚は，次の心理社会的発達段階の親密

性に関与してくる (Erikson，1950　仁科訳 1977)。第Ⅲクラスタのアイデンティティの様態は，親密性の基盤となる，異性との間でお互いの個性を受容し信頼関係を築いていくという過程の中で，今まで築き上げたジェンダー・アイデンティティが揺らいでいる状態だと考えられる。よってこの群を〈自我アイデンティティ優位群〉とした。第Ⅳクラスタは MEIS 得点の高さとジェンダー・アイデンティティ得点の高さが特徴的であった。この群は，自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティ双方の確立がなされている状態であると考えられる。よってこの群を〈アイデンティティ達成群〉とした。

ジェンダー・アイデンティティは，ライフサイクルの各期，つまり，乳幼児期から学童期，思春期，青年期，成人期，中年期，老年期において目指すべき自己実現と危機を繰り返しながら生涯発達し続ける (石原・井上・松村，2011)。乳幼児期，子どもは自身の性別学的性を認識させられ，自己のコアな部分を成長させていく。学童期には，友人・仲間関係を通して，同性，異性の性に関心を向けるようになる。続く思春期では，第二次性徴に伴う身体的な変化に直面し，強い性衝動への葛藤を経験し，その葛藤を通して自らの同一性を再確立していく。そして青年期では，自我アイデンティティの確立が大きなテーマとなるが，それとともに，性的指向の他者とお互いの個性を受容し，信頼関係を築いていく時期でもある。しかし，青年期における本当の意味での異性との出会いは心理学的にまず，自己の自我境界が明確に作り上げられていることを前提とする (鑪，2002)。つまり，真の自己がなくては，他人との出会いはおぼつかなくなってしまうといえる。青年期のあとに続く成人期は，自己を異性の中に没入させることによって，逆説的に自己を発見する過程である (鑪，2002)。〈アイデンティティ達成群〉は，自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティ双方の確立がなされている状態であり，成人期の課題である親密性の課題に向けての土台作りがなされている推察される。

5.　青年期女性の対象関係とアイデンティティとの関連

上記のような対象関係の様態を持つ群のアイデンティティを検討するために，対象関係尺度得点でのクラスタと，MEIS およびジェンダー・アイデンティティ得点でのクラスタで χ^2 検定を行った結果，有意差が認められた ($\chi^2 = 70.23$，$df = 12$，$p < .01$) (Table 4)。

『対象関係未熟群』には，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉が有意に多く，〈自我アイデンティティ優位群〉に分類された人が有意に少なかった。『対象関係不信群』では，〈アイデンティティ未熟群〉の人が有意に多く，〈アイデンティティ達成群〉の人が有意に少なかった。『対象関係安定群』では，〈アイデンティティ未熟群〉〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉の人が有意に少なく，〈アイデンティティ達成群〉〈自我アイデンティティ優位群〉の人が有意に多かった。『対象関係希薄群』『自己中心群』においては有意差が認められなかった。『対象関係希薄群』，『自己中心群』は中間群に位置すると考えられる。つまり，『対象関係未熟群』には，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉が，『対象関係不信群』では，〈アイデンティティ未熟群〉が有意に多かった。また，『対象関係安定群』では，〈アイデンティティ達成群〉〈自我アイデンティティ優位群〉の人が有意に多かった。これより，対象関係が安定している群では，青年期において自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティの確立がなされている人が多く，対象関係が不安定な群は，これら

Table 4　対象関係得点によるクラスタとMEIS，ジェンダー・アイデンティティ尺度得点によるクラスタとの$\chi 2$検定結果

対象関係得点によるクラスタ		MEIS　&　ジェンダー・アイデンティティ				合計
		未熟群	ジェンダー優位群	自我優位群	達成群	
対象関係未熟群	度数	29	**25**	5	17	76
	標準残差	0.7	**2.3**	-2.6	-0.6	
対象関係不信群	度数	**17**	3	1	1	22
	標準残差	**3.5**	-0.8	-1.6	-2	
対象関係希薄群	度数	13	11	6	9	39
	標準残差	0	1	-0.6	-0.3	
自己中心群	度数	9	5	8	7	29
	標準残差	-0.3	-0.4	1	-0.2	
対象関係安定群	度数	6	2	**23**	**22**	53
	標準残差	-2.8	-2.7	**3.9**	**2.3**	
合計	度数	74	46	43	56	219
	期待度数	74	46	43	56	219

は有意に人数が少ないセル，　　は有意に人数が多いセルを示す。

のアイデンティティの確立がなされていない人が多く存在することが示された。

『対象関係未熟群』には，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉に分類された人が多く，〈自我アイデンティティ優位群〉に分類された人が少なかった。『対象関係未熟群』は自他の境界が未分化で，自己優位的な視点にたち他者を操作的に利用しようとする傾向があるが，他者の反応に過敏で見捨てられ不安を抱きやすい群であった。このような対象関係の特徴をもつ人々は，青年期の時点で，ジェンダー・アイデンティティの確立がなされてはいるものの，自我アイデンティティの確立がまだなされていない人が多く存在することが示された。青年期は，自意識が増大し自他の区別に極度に敏感になる時期である。それ故に自律性がテーマとなる幼児期に自己と他者の心理的な境界が確立されていないと自己意識，自分の価値，自分の感覚が自分のものと他者のものとの混同を引き起こすということが起こる (鑪，2002)。故に，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉では自律性のテーマが対象関係に関連しているのではないかと考えられる。前田 (1985) によると，Erikson の心理社会的発達段階において，自律性がテーマとなる時期は，Freud,S. の肛門期に相当する。この時期は母と子の排泄訓練が大きなテーマとなる。そして，排泄訓練こそ母親と子との間の発達上の葛藤が徹底的に繰り広げられる場面である (Tyson & Tyson，1990 皆川・山科監訳 2008)。つまり，子どもは，母親の愛情を保ち続けたいと欲しており，また同時に，母親の愛情を失う恐れも感じている。こうした矛盾した感情が同時に存在することに耐えられなくなり，母親の愛情を確保するため，母親の規範に従い，その規範を内在化するようになる。そして，この発達上の葛藤は精神内的な葛藤になる (Tyson & Tyson，1990 皆川・山科監訳 2008)。『対象関係未熟群』はこの時期に固着していると考えられ，母親との発達上の葛藤と，それに伴う精神内的な葛藤を体験していないか，体験が薄かったのではないかと推察される。

また，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉のアイデンティティの様態は，同一性が拡散している状態においては，性的同一性の混乱が見られるとする Erikson の理論と異なる結果となった。女子は，母親への同一視から父親への同一視へと移行することを通して女性としての自己意識を高

めていく (Blos, 1962 野沢訳 1971) が，そこには母親との葛藤が存在する。よって，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉が確立しているジェンダー・アイデンティティは，成熟した段階にはないことが推察される。

『対象関係不信群』では，〈アイデンティティ未熟型〉の人が多く，〈アイデンティティ達成群〉の人が少なかった。『対象関係不信群』は他者の反応に敏感であり見捨てられ不安を抱きやすく，他者と深く付き合うことを恐れて安定した関係を持続的に保つことが難しい群であった。このような対象関係の特徴をもつ人々は青年期の時点で，ジェンダー・アイデンティティの確立も自我アイデンティティの確立もなされていない人が多く存在することが示された。乳幼児期，基本的な心理的形成の過程として信頼感が挙げられ，この信頼感確立のテーマが後々の発達の基盤となる。もし，世界に対して信頼することができないのであれば，精神的に健全に生きていくことはできない (鑪, 2002)。また，自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティともに，他者や社会との関係の間で成立するものである。故に，この群は基本的信頼感確立のテーマが対象関係に関連しており，それ故に，両アイデンティティが未熟な〈アイデンティティ未熟群〉が多く存在したと推察される。

『対象関係安定群』では，〈アイデンティティ未熟群〉〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉の人が少なく，〈アイデンティティ達成群〉〈自我アイデンティティ優位群〉の人が多かった。『対象関係安定群』は，他者と深く付き合うことに過度の不安を抱くことがなく，他者との関係性も維持できる群であった。このような対象関係の特徴をもつ人々は，青年期の時点で，ジェンダー・アイデンティティの確立も，自我アイデンティティの確立もなされている人，もしくは自我アイデンティティの確立はなされ，ジェンダー・アイデンティティが揺らいでいる人が多く存在することが示された。青年期，青年は自我アイデンティティの確立がテーマとなり，さらに異性との本当の出会いによって自己の性の同一性も確立していく。そして，青年期の自我アイデンティティのテーマはのちの成人期における親密性のテーマの基盤となる。よって，『対象関係安定群』にある人たちは，幼少期から青年期まで安定した対象関係を築くことができ，自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティを確立できていたと考えられる。

6. 青年期女性の対象関係と境界例心性との関連

対象関係尺度でのクラスタによって境界例心性の得点に差が認められるかを検討するために，対象関係クラスタを独立変数，境界例心性を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果，群の効果が認められたため Tukey の多重比較を行った (Table 5)。

『対象関係未熟群』『対象関係不信群』は，『対象関係希薄群』『自己中心群』『対象関係安定群』よりも境界例心性得点が有意に高かった。このことより対象関係が不安定な群は，対象関係が安定している群よりも青年期で一時的に不安定になりやすく，アイデンティティの確立にも影響することが示された。

嫌悪に対する懸念，関係断絶において『対象関係未熟群』と『対象関係不信群』との間に有意な差はみられなかったが，孤立感，つながり希求において『対象関係未熟群』の方が『対象関係不信群』よりも有意に得点が高かった。特に，『対象関係未熟群』は孤立感，つながり希求において他の 4 群よりも有意に得点が高かった。『対象関係未熟群』『対象関係不信群』では，青年期において境

Table 5　対象関係各群と境界例心性尺度との分散分析結果

	1. 対象関係未熟群 (n =76)	2. 対象関係不信群 (n =22)	3. 対象関係希薄群 (n =39)	4. 自己中心群 (n =29)	5. 対象関係安定群 (n =53)	F値	多重比較 (Tucky法)
境界例心性	47.9 (7.9)	44.9 (7.8)	38.2 (6.9)	36.5 (6.4)	34.3 (7.1)	33.70^{***}	1,2>3,4,5
嫌悪に対する懸念	15.6 (2.8)	15.8 (3.6)	13.7 (3.3)	12.2 (2.8)	10.92 (2.9)	23.75^{***}	1>3,4,5 2>4,5 3>5
孤立感	8.9 (2.8)	6.6 (2.4)	6.1 (2.2)	5.5 (2.1)	6.3 (2.8)	16.87^{***}	1>2,3,4,5
関係断絶	13.7 (2.9)	15.0 (2.4)	11.8 (3.0)	11.7 (3.6)	9.5 (2.2)	23.57^{***}	1,2,3,4>5 2>3,4 1>3
つながり希求	9.7 (2.4)	7.5 (2.3)	6.5 (2.4)	7.1 (2.3)	7.6 (2.5)	15.41^{***}	1>2,3,4,5

( )は標準偏差を表わす　　$^{***}p < .001$

界例心性が活発化しやすいと推察される。特に,『対象関係未熟群』は 1 人でいるときの孤独感やさみしさに耐えがたく，自分の存在を確かめるために他者の存在や，他者とのつながりを痛烈に求める傾向があると考えられる。『対象関係未熟群』は，自他の境界が未分化で，自己優位的な視点にたち他者を操作的に利用しようとする傾向があるが，他者の反応に過敏で見捨てられ不安を抱きやすい群であった。『対象関係未熟群』の特徴であった見捨てられ不安の高さから他者とのつながりを痛烈に求めやすいことが伺われる。また，自他未分化の特徴から“1 人でいる能力”(Winnicott，1965 牛島訳 1977) の未熟が伺え，それ故に孤立感を感じやすいのだと考えられる。また,『対象関係不信群』では，他者の振る舞いを過度に気にし，不安のあまり嫌われていないかを確認したくなったり，他者に適度に依存できず，必要な時にしか付き合いを求めないと考えられる。

『対象関係希薄群』と『自己中心群』との間には，どの因子においても有意な差は認められなかった。また,『対象関係安定群』は嫌悪に対する懸念において他の群よりも有意に得点が低かった。関係断絶において『対象関係安定群』は『自己中心群』との間に有意差はみられなかったものの，他の 3 群よりも有意に低かった。『対象関係希薄群』『自己中心群』『対象関係安定群』では，青年期において『対象関係未熟群』『対象関係不信群』よりも境界例心性があまり活発化しないと推察される。『対象関係希薄群』は対人関係が希薄であることが特徴であった。よって，対人関係間で生じやすくなる境界例心性も生じにくいと考えられる。また,『自己中心群』は自己優位的な視点が特徴であった。よって，対人関係において他者の反応を気にすることが少なく，それ故に境界例心性も生じにくいと考えられる。さらに,『対象関係安定群』では他者や重要な他者の振る舞いを過度に気にしたり, 不安のあまり嫌われていないか確認したくなるとことは他の群よりも少ないと考えられる。

研究 2

目的

ジェンダー・アイデンティティと自我アイデンティティの確立度合によって 4 群が抽出された (Figure 2)。その中で，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉は，青年期において自我アイデンティティが拡散しており，ジェンダー・アイデンティティが確立している群であった。同一性拡散状態の心理的特性の一つとして性的同一性の混乱が挙げられているが，この〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉はこの理論にそぐわない結果となった。また，研究 1 の結果より〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉は『対象関係未熟群』に多く，自律性のテーマが関連していることが推察された。さらに，成熟したジェンダー・アイデンティティの確立には至っていない可能性が示唆された。そこで，同じくジェンダー・アイデンティティ得点が高かった〈アイデンティティ達成群〉を比較対象とし，ジェンダー・アイデンティティにどのような質的な差があるのかを検討する。

比較対象とした〈アイデンティティ達成群〉は，『対象関係安定群』に多く，〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉とは対象関係様態も異なる。対象関係とは“対人場面における個人の態度や行動を規定する，精神内界における自己と対象 (他者) との関係性の表象” (井梅・平井・青木・馬場，2006) のことであり，内的な対象関係は外的な対人関係に投影される。青年期において，親密な対人関係を作ることは，自己のアイデンティティ感覚を強固なものにし，次段階の成人期の発達課題である親密性の確立に寄与する。しかし，同一性の未熟さや脆弱さが潜んでいるときには，親密な対人関係を持とうとすること自体が脆弱さを顕在化させる。Erikson (1959) は，親密性を異性との親密性を中心にしながらも，これと関連した形での他の対人関係においても親密な関係を作ることであるとしている。つまり，異性と結婚して家庭をもつことだけでなく，親密な仲間関係をもつことも必要であるとしている。このように，青年期では友人関係，異性関係ともに親密な対人関係をつくることが，アイデンティティを確立するためには重要であるといえる。

また，対象関係は親子関係，友人関係，恋人関係，配偶者というように，重要他者が発達段階に応じて変わっていくが，基盤となるのは親子関係である。そのため，対象関係を検討する際には，親子関係を加味する必要がある。そこで，研究 1 の結果よりジェンダー・アイデンティティ得点は同じく高いが，対象関係の様態が異なる Ⅰ :『対象関係未熟群』×〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉と Ⅱ :『対象関係安定群』×〈アイデンティティ達成群〉を対象に，対象関係の基盤となる親子関係と現在の対人関係，および女性としての自己意識について，各群の質的な差を検討する。

方法

1. 調査協力者・調査時期 研究 1 における質問紙調査で，面接調査可能と記入していた Ⅰ :『対象関係未熟群』かつ〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉7 名，Ⅱ :『対象関係安定群』かつ〈アイデンティティ達成群〉7 名の合計 14 名に面接調査を依頼した。そのうち面接調査の協力が得られた女子学生 10 名を分析対象とした (Table 6)。調査時期は 2014 年 10 月から 12 月であった。

Table 6　調査対象者のプロフィール

対象関係安定群×アイデンティティ達成群				対象関係未熟群×ジェンダー優位群			
ID	年齢	学年	交際経験の有無	ID	年齢	学年	交際経験の有無
A	20	3	現在恋人あり	F	20	3	現在恋人あり
B	18	1	現在恋人あり	G	18	1	交際経験なし
C	18	1	交際経験あり	H	20	2	交際経験なし
D	20	2	交際経験なし	I	21	4	交際経験なし
E	22	3	現在恋人あり	J	21	4	現在恋人あり

2.　調査手続き　親子関係，対人関係としての同性，および異性関係，女性としての自己意識を訊ねる半構造化面接を行った。面接場所は，個人情報の漏れない面接室で行った。面接時間は 1 人当たり 1 回 90 分を 2 回行った。なお，本調査を実施するにあたり，広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

3.　分析手順

面接調査データの整理は，前盛・岡本 (2008) の手法にならった。具体的には，逐語記録から，クラスタごとに①親子関係，②同性関係，③異性関係，④女性としての自分への意識を文章単位で抽出した。これらをそれぞれ内容別に要約した後，類似したものをグルーピングしてカテゴリ化を行った。得られたカテゴリを下位カテゴリとし，意味が近いと考えられる下位カテゴリに対してグルーピングを行い，上位カテゴリとした。以下，上位カテゴリを【】，下位カテゴリを[ ]と表記する。

結果と考察

Ⅰ:『対象関係未熟群』×〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉では，親子関係 8 個，同性関係 2 個，異性関係 3 個，女性としての自己意識 4 個の上位カテゴリ，および全 28 個の下位カテゴリが生成された。一方，Ⅱ:『対象関係安定群』×〈アイデンティティ達成群〉では，親子関係 4 個，同性関係 3 個，異性関係 4 個，女性としての自己意識 5 個の上位カテゴリ，全 33 個の下位カテゴリが生成された。生成されたカテゴリを Table 7 に示す。また，上位カテゴリの定義を Table 8 に示す。

後日，最終的に抽出されたカテゴリの妥当性を検討するため，それぞれのカテゴリの特徴を提示し，全ての発言について，臨床心理学を専攻する大学院生 2 名が独立して再分類した。評定者間の一致率は平均 81%であり，十分な妥当性が示された。なお，評定が一致しない項目は，評定者間で協議の上分類を行った。

Table 7　各群において生成されたカテゴリ

	『対象関係安定群』×〈アイデンティティ達成群〉 (n=5)	『対象関係未熟群』×〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉 (n=5)
同性関係	【受容感】 ［素の自分の受容感］ 【友人への信頼感】	【関係性への葛藤】 ［接近への葛藤］［嫌われることへの不安・恐怖］ 【情緒交流の難しさ】 ［意見の言えなさ］［過度な感情表出への後悔］ 【関係断絶】
異性関係	【親密性のための恋愛】 ［身体症状の消失］［防衛の消失］ ［全体性としての捉え］［相互性］［無条件性］ 【異性へアピールできる魅力】 ［相手への信頼感］［独自の魅力］ 【性的対象になることへの受容感】 ［親密性への喜び］［リスクに対する不安］ ［パートナーとの話し合い］	【アイデンティティのための恋愛】 ［相手からの評価］［過剰な自己犠牲］ ［同等の対価］［相手への攻撃］［見捨てられ不安］ 【異性へアピールできる魅力】 ［相手の望み通りの魅力］ 【異性との関係性の薄さ】 ［女性コンプレックス］［親密性の回避］［幼い男子イメージ］ 【性的対象になることへの非受容感】 ［性的機能としての自分］［漠然とした不安］［親密性への不安］
女性としての生き方について	【第二次性徴の受容】 ［学校教育での受入れ準備］ ［大人への成長の実感としての捉え］ 【女性特有のライフイベントへの期待】 ［自己成長源］［親になることへの喜び］ 【女性であることへの肯定的イメージ】 ［表現することの喜び］［表現に対する他者からの受容感］ 【関係性への志向】 ［両性との親密性への志向］［社会からの容認］	【第二次性徴の受容】 ［学校教育での受入れ準備］［身体機能の始まりとしての捉え］ 【女性特有のライフイベントへの不安】 ［自己成長の阻害］［親になることへの不安］ 【女性であることへの肯定的イメージ】 ［身体機能としての役得］ 【女性であることへの否定的イメージ】 ［性的イメージ］［自己像とのギャップ］［女性集団への嫌悪］ ［社会的弱者］［表現に対する非受容感］ 【関係性への志向】 ［異性との親密性への志向］
親子関係	【父親存在の希薄さ】 ［物理的な不在］ 【ネガティブな父親イメージ】 ［厳格な父親イメージ］［怖い父親イメージ］ 【父親の再認識】 ［父親イメージの捉え直し］［母親による父親イメージの補い］ 【個を尊重した関わり】 【ポジティブな父親イメージ】 ［尊敬できる父親イメージ］［頼りになる父親イメージ］ 【母子密着】 ［依存的関係］ 【母親の再認識】 ［母親イメージの捉え直し］ 【個としての母子関係】 ［理想的な母親イメージの内包］	【父親存在の希薄さ】 ［物理的な不在］［家族成員からの弾き出し］ 【ネガティブな父親イメージ】 ［厳格な父親イメージ］［怖い父親イメージ］ 【諦め】 【母子密着】 ［依存的関係］［友達母娘］

なお，【 】は上位カテゴリ，［ ］は下位カテゴリを示す。

Table 8　各上位カテゴリの定義

		カテゴリ名	定義
両群共通	異性関係	異性へアピールできる魅力	異性に女性として，他の女性にはない良い所があるという自負。
	自己意識	第二次性徴の受容	第二次性徴という身体的変化を受け入れられていること。
		女性であることへの肯定的イメージ	女性に生まれて良かったという感覚をもっていること。
		関係性への志向	女性として今後，他者との関係性の中で生きていきたいという思いのこと。
	親子関係	父親存在の希薄さ	家庭の中での父親の存在感が薄いこと。仕事都合による物理的な不在の他に，精神的な不在も含む。
		ネガティブな父親イメージ	父親に対する否定的なイメージのこと。
		母子密着	母親と子どもが密着状態にある。子どもは母親に依存しており，母親もそれを受け入れていること。
『対象関係未熟群』×〈ジェンダー優位群〉	同性関係	関係性への葛藤	親しくなりたいが，親しすぎると嫌われるかもしれないという不安から友人との関係性を築きにくいこと。
		情緒交流の難しさ	友人に嫌われたくないという思いから自分の感情や意見を出せないということ。自分の感情を留めて置けずに相手に全部ぶつけてしまう場合も含む。
		関係断絶	友人とのいざこざがあると，関係を自分から切ってしまうこと。
	異性関係	アイデンティティのための恋愛	自分本位で，自分とは何かということを相手で試しながら成長していこうとする恋愛。
		異性との関係性の薄さ	異性と関わりが少ないこと。異性と関わる機会のなさや，異性と関わる必要がないために関わらないということを含む。
		性的対象になることへの非受容感	異性から性的対象としてみられる，扱われることに関して，否定的な思いがあるという感覚。異性に自分が受け入れられるのだろうかという不安感を含む。
	自己意識	女性特有のライフイベントへの不安	結婚，妊娠，出産など今後起こるだろうライフイベントに対し，否定的な思いを抱いていること。
	親子関係	諦め	親に対する否定的な思いを受け入れるのではなく，放棄すること。故に，否定的な思いは意識的・無意識的に解消されないままである。
『対象関係安定群』×〈達成群〉	同性関係	受容感	友人から自分を受け入れてもらえている感覚。
		友人への信頼感	悪い部分も良い部分もどっちを相手にぶつけても相手が離れない，受け入れてくれるという感覚。
	異性関係	親密性のための恋愛	相手の全体性を受け入れ，相手も自分もともに成長していこうとする恋愛。次の成人期のテーマである親密性の基盤が出来ている。
	自己意識	性的対象になることへの受容感	異性から性的対象としてみられる，扱われることに関して，十分な心の準備が出来ているという感覚。異性に受け入れられているという感覚を含む。
		女性特有のライフイベントへの期待	結婚，妊娠，出産など今後起こるだろうライフイベントに対し，肯定的な思いを抱いていること。
	親子関係	父親の再認識	思春期，反抗期を通して，今までの父親イメージが変わり，新たな父親イメージが作られること。イメージの変化に伴い，父子の関係性にも変化がおきる。
		個を尊重した関わり	一人の人間，一人の大人として親から認められ，扱われること。子どもの意見を第一に考え，尊重し，それが子どもにも伝わっていること
		母親の再認識	思春期，反抗期を通して，今までの母親イメージが変わり，新たな母親イメージが作られること。イメージの変化に伴い，母子の関係性にも変化がおきる。
		個としての母子関係	一人の大人同士と言う関係。子どもは母親を尊敬に値する人物としてみており，母親も子どもの意思を尊重するという関係。
		ポジティブな父親イメージ	父親に対する肯定的なイメージ。父親への尊敬の念が含まれる。

各群の特徴

Ⅰ:『対象関係未熟群』×〈ジェンダー・アイデンティティ優位群〉

この群の親子関係の特徴は，母親との結びつきが強く（【母子密着】），父親との結びつきが弱いことであった（【父親存在の希薄さ】）。特に父親は，仕事で忙しく家に居ないといった［物理的な不在］状態や，［家族成員からの弾き出し］に合い，家族の中での父親の存在感がほとんどないような状態であった。また，【ネガティブな父親イメージ】を抱いており，そのイメージを受け入れ，変化させることなく【諦め】ているため，【ネガティブな父親イメージ】はそのまま維持されていた。母親との関係においては，母親に一方的に甘え，母親もそれを受容している［依存的関係］や，友人関係の在り方に近い［友達母娘］の関係にある。このような母親との関係性は幼少期から変化することなく，葛藤も感じていなかった。

同性関係では，［嫌われることへの不安・恐怖］から親しくなりたいと思っても一歩踏み出せず（［接近への葛藤］），親しい仲であっても［嫌われることへの不安・恐怖］から自分の意見や感情を上手く表現できないという【情緒交流の難しさ】を感じていた。そして対人関係がうまくいかないと感じると,【関係断絶】に至るなど他者と安定した関係を維持することが難しいことが示された。

異性関係では以下のような特徴が示された。恋人がいる場合，交際している［相手からの評価］に過敏で，相手から気に入られようと［過剰な自己犠牲］を行う。しかし，この犠牲は相手を思いやり，純粋に自分の身を捧げるのではなく，自分が相手にしてあげた分と［同等の対価］を求める。そして［同等の対価］が相手から与えられない場合，［見捨てられ不安］を抱いたり，自分の感情を怒りとして相手にぶつけるという行動に至る（［相手への攻撃］）。恋人との性的関係においても［性的機能としての自分］というように，機能的役割を果たしているという認識である。一方，恋人がいない場合，［女性コンプレックス］から相手が自分のことを受け入れてくれるのか不安になり，異性との関係を回避したり（［親密性の回避］），［幼い男子イメージ］からそもそも男子を関わる気すら起こらない場合もあった（【異性との関係性の薄さ】）。

女性としての自己意識においては，以下の特徴が示された。この群は，［学校教育での受入れ準備］を通して【第二次性徴の受容】は出来ていた。しかし，第二次性徴を成長の証ではなく［身体機能の始まりとしての捉え］であり，あくまで生理的機能として受け入れていた。また，【女性であることへの否定的イメージ】を抱いており，女性という単語から［性的イメージ］を抱き，女性としての自分を中々想像できない。想像できた場合でも，一般的な女性イメージと［自己像とのギャップ］を感じている。さらに，女性として自分が楽しんでいることや楽しもうとしていることを他者に笑われる，馬鹿にされるなどの体験をしており，［表現に対する非受容感］を感じていた。今後起こるだろう妊娠，出産などに対しては，【女性特有のライフイベントへの不安】を抱いており，そういったライフイベントは今後自分がやりたいことができないなど［自己成長の阻害］要因として捉えている。また，［親になることへの不安］を抱いていることも示された。さらに，未来への指向性として今後女性としてどのように生きていきたいかに関しては，［異性との親密性への指向］があり，異性に認められたいという思いがあることが示された。

この群の親子関係の特徴は，母親との［依存的関係］と［友達母娘］であった。密着した母子関

係は子どもの精神的な自立を困難にさせ，依存と独立の葛藤を生じさせる (小谷，2010)。故に，この群では他者との関係性も不安定になっていると推察される。さらに，密着した母子関係を断ち切る父親の力も希薄であるため，この群では密着した母子関係が幼少期から維持されていると考えられる。量的研究結果からも『対象関係未熟群』には自律性のテーマが関連していることが示唆されており，この結果は量的研究とも見解が一致するといえる。さらに，適切な女性同一視は母親と父親を通して獲得され，成熟していく (Erikson，1959)。しかし父親との結びつきの弱さは，父親への同一視を弱め，成熟性を阻んでいることが考えられる。子どもは両親との三者関係の中で，嫉妬，競争の力学を体験しながら人格の成熟性を高めていく (小谷，2010) が，この群では母親から父親への同一視の移行がなされていない。よって，ジェンダー・アイデンティティの基盤は築かれているものの，成熟したジェンダー・アイデンティティを獲得できていない可能性が考えられる。

Ⅱ：『対象関係安定群』×〈アイデンティティ達成群〉

この群の親子関係は，両親の [イメージの捉え直し] を通して，【母子密着】した三者関係から，両親との結びつきのバランスが取れた関係へと変容していったことが特徴であった。幼少期，父親に対して［厳格な父親イメージ］や［怖い父親イメージ］を抱いており，父親と距離をとり，母親に依存する (［依存的関係］) 。そして思春期，両親からの【個を尊重した関わり】や反抗期を通して，［父親イメージの捉え直し］が行われ，【ネガティブな父親イメージ】は【ポジティブな父親イメージ】へと捉えなおされる。母親に関しても［母親イメージの捉え直し］が行われ，【母子密着】から【個としての母子関係】へと変容していく。この群でもⅠ群同様，父親の［物理的な不在］があったが，［母親により父親イメージの補い］がされていた。

同性関係では，他者への【信頼感】を基盤に良い自分でも，悪い自分でも，友人に素の自分を受け入れてもらえているという【受容感】を感じていた。

異性関係では，良い部分，悪い部分含めた相手の全体性を受け入れ (［無条件性］，［全体性としての捉え］)，相手とともに自分も成長していこうという［相互性］のある【親密性のための恋愛】を体験している。恋人との性的関係も，［リスクに対する不安］を感じているものの，［パートナーとの話し合い］を通して，一緒に不安を解消していく過程があり，相手を受け入れ，自分も相手に受け入れられるという［親密性への喜び］を感じていた。現在恋人がいない場合でも，［相手への信頼感］を元に［自分独自の魅力］を異性に対して表現し，親密性を深める関係を形成していた。

女性としての自己意識においては以下のような特徴が示された。Ⅰ群同様，この群でも［学校教育での受入れ準備］を通して【第二次性徴の受容】が出来ていたが，Ⅰ群と異なり，第二次性徴を［大人への成長の実感としての捉え］としていた。そして，【女性であることへの肯定的イメージ】を抱いており，女性としての自分を様々な形で表現することに喜びを感じており (【表現することの喜び】)，その表現が他者から受け入れてもらえているという［表現に対する他者からの受容感］を感じている。将来起こるであろう妊娠や出産といった女性特有のライフイベントに関しては，Ⅰ群と異なり，そのようなライフイベントが自分をより成長させてくれるといった［自己成長源］として捉え，［親になることの喜び］を想像し，期待を抱いている。未来への指向性として，今後女性としてどのように生きていきたいかに関しては自立し，働くことを通して［社会からの容認］を望

み，Ⅰ群と異なり［両性との親密性への志向］を通して成長していく望みがあった。

この群では他者への信頼感を基盤に同性，異性との関係性を築き，深めていることが特徴であった。鑪 (2002) が世界に対して信頼することができないのであれば，精神的に健全に生きていくことはできない と述べている通り，基本的信頼の確立は後の心理社会的発達段階に影響する。量的研究結果からも，『対象関係安定群』は基本的信頼感の確立がなされていることが示唆された。この結果は量的研究とも見解が一致するといえる。また，この群はⅠ群と異なり両親との三者関係の中で人格の成熟性を高めていった (小谷，2010) ことが推察される。特に，母親への同一視から父親への同一視の移行を通して，成熟したジェンダー･アイデンティティを獲得していったと考えられる。そして，三者関係という家族システムから分離して社会システムの中で対人関係を通して自己のアイデンティティを確かなものにし，成人期のテーマとなる親密性の基盤を築いていると推察される。

総合考察と今後の課題

本研究の成果

本研究では，青年期女性の対象関係がアイデンティティの確立と，青年期心性としての境界例心性にどのように関連するかを検討した。さらに，対象関係の基盤となる親子関係，現在の対人関係，女性としての自己意識の特徴から，質的な特徴の考察を行った。

その結果，対象関係が不安定な群は対象関係が安定している群に比べて，青年期における自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティの確立がなされておらず，一時的な不安定状態に陥りやすいことが示された。特に，『対象関係未熟群』は青年期においてジェンダー・アイデンティティの確立はなされているものの，自我アイデンティティの確立がなされていない人が多く存在することが示された。『対象関係未熟群』はその群の特徴から自律性のテーマが関連していることが示唆され，ジェンダー・アイデンティティの確立はなされているという結果であったが，成熟したジェンダー・アイデンティティの確立ではないことが推察された。この群の親子関係としては，母子密着と父親存在の希薄さが特徴的であることが示された。また，他者との関係性を維持できず，接近と回避の葛藤があることが示され，女性であることに否定的なイメージをもっていることが示された。この群の特徴である母子密着の関係は幼少期から変化なく，母親への嫉妬や母親に勝ちたいという競争心を体験していない為，父親同一視への移行が完了していないことが推察された。そして，基本的なジェンダー・アイデンティティは獲得しつつも成熟したジェンダー・アイデンティティの獲得には至っていないことが考えられた。一方，『対象関係安定群』は青年期において自我アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティ双方の確立がなされている人が多く存在することが示された。『対象関係安定群』はその群の特徴から，基本的信頼がしっかりと確立されていることが示唆された。この群の親子関係としては，母子密着した三者関係から反抗期を通して両親を再認識し，父親，母親双方とのバランスが取れた関係へと変容したことが特徴的であった。また，他者への信頼感を基盤に同性，異性ともに親密性を築いていることが示され，女性であることに肯定的なイメージを持っていることが示された。この群は『対象未熟群』と比較して母親との嫉妬や競争心

を体験し父親への同一視へと移行していったことが推察された。その葛藤を通して成熟したジェンダー・アイデンティティを獲得し，親密性の基盤を築いていると考えられた。

本研究では対象関係様態が青年期のアイデンティティ確立の程度と境界例心性に関連することが示唆された。そのため，見捨てられ不安や不安定な対人関係の背景には対象関係が関連していると考えられ，境界例様の症状を示す青年の臨床的援助を行う際に対象関係の視点は役立つといえる。

今後の課題

本研究の課題として性差検討の不十分さが挙げられる。今回はジェンダー尺度の構成上，分析対象を女性に絞った。そのため，本研究の結果が女性特有なのか男性とも重なる部分があるのかなどの性差の検討が十分ではないといえる。今後はジェンダー尺度を再検討し，性差について検討していく必要がある。また，質的検討の不十分さも今後の課題である。本研究では 5 つの対象関係群が抽出されたが，人数比の都合上 2 群での検討を行った。そのため他群の対象関係の質的な特徴が明らかになっていない。今後は対象者を増やすなどして他群との比較検討を行っていく必要がある。

引用文献

American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders Forth edition.* New York : American Psychiatric Publshing. (アメリカ精神医学会　高橋三郎・大野　裕・染矢俊幸 (訳) (2003) DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル　医学書院)

馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕 (編) (1992). 青年期の深層　日本の深層分析 (10) 有斐閣

Besser, A. & Blatt, S. J. (2007). Identity consolidation and internalizing and externalizing problem behaviors in early adolescence. *Psychoanalytic Psychology*, 24, 126-149.

Blos, P. (1962). *On adolescence : A psychoanalytic interpretation.* New York: Free Press. (ブロス, P. 野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学　誠信書房)

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.

土肥伊都子 (1996). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成　教育心理学研究 44 (2), 187-194.

土肥伊都子 (2011). 女子大学卒業生のジェンダー・パーソナリティの発達　――職業・家庭生活に関するインタビューを通して――　研究紀要 人文科学・自然科学篇 52, 1-16.

江上奈美子 (2013). 非臨床群の境界例心性に関する研究の概観　九州大学心理学研究: 九州大学大学院人間環境学研究院紀要 14, 71-78.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society.* New York : W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977) 幼児期と社会　みすず書房)

Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, 1, 1-171.

Erikson, E. H. (1968). *Idenntity: Youth and Crisis.* New York : W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1982) アイデンティティ：青年と危機　改訂版　金沢文庫)

古川奈美子・北山 修 (2004). 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性

について　九州大学心理学研究 5, 207-218.
石原留美・井上明子・松村恵子 (2011). 性アイデンティティ概念の検討　香川県立保健医療大学雑誌, **2**, 87-91.
Jacobson, E. (1964). *The self and the object world*, New York.: International University Press.
(ジェイコブソン, E. 伊藤洸 (訳) (1981) 自己と対象世界　岩崎学術出版社)
井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場 禮子 (2006) 日本における青年期用対象関係尺度の開発　パーソナリティ研究 14 (2), 181-193.
熊野みき (2012). アイデンティティ論からみた関係性　岡本祐子・兒玉憲一 (編著) 臨床心理学　ミネルヴァ書房, Pp.295-310.
小谷英文 (編) (2010). 現代心理療法入門　PAS 心理教育研究所出版部
前田重治 (1985). 図説臨床精神分析学　誠信書房
前盛ひとみ・岡本祐子 (2008). 重症心身障害児の母親における障害受容過程と子どもの死に対する捉え方との関連――母子分離の視点から――, 心理臨床学研究, 26, 171-183.
Masterson, J. F. (1972). *Treatment of borderline adolescent : A developmental approach.* New York : Jphn Wiley and Sons, Inc.
(マスターソン, J. F. 成田善弘・笠原嘉 (訳) (1979) 青年期境界例の治療　金剛出版)
村山隆志 (2002). 思春期を迎える子どもの症状から何を読み取るか　思春期・青年期における心身医学と教育の関わり　心身医学,　42 (1), 21-27.
岡田　努 (2007). 現代青年の心理学　若者の心の虚像と実像　世界思想社
重松晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究: 境界例心性を通して　心理臨床学研究, 22, 6, 659-664.
下山晴彦 (2006). つなぎモデルによる学生相談の実際　河合隼雄・藤原勝紀・小川之 (編) 学生相談と心理臨床　金子書房, 139-156.
谷　冬彦 (2001).青年期における同一性の感覚の構造 : 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成　教育心理学研究 49 (3), 265-273.
田村和子・井上果子　(2005).　青年期における境界例心性と養育態度の関連について　こころの健康, 20, 73-87.
鑪幹八郎 (2002). アイデンティティとライフサイクル論　鑪幹八郎著作集 I　ナカニシヤ出版
鑪幹八郎・山本力・宮下一博 (編) (1995) アイデンティティ研究の展望 I　ナカニシヤ出版
苫米地憲昭 (2006). 大学生: 学生相談から見た最近の事情　臨床心理学, 6, 168-172.
Tyson, P. & Tyson, R. L. (1990). *Psychoanalytic theories of development : an integration.* Yale university.
(タイソン, P. & タイソン, R. L. 皆川邦直・山科満 (監訳) (2008) 精神分析的発達論の統合②　岩崎学術出版社)
渡辺直己 (2011) 自己愛類型別にみた大学生の対人関係および対人的価値観: 自己愛の 2 側面の視点から　北星学園大学大学院論集 2, 107-126.
Winnicott, D. W. (1965). *Maturational processes and the Facilitating Environment: Studies in the theory of*

emotional development. London: Hogarth Press.
(ウィニコット, D. W. 牛島定信 (訳) (1977) 情緒発達の精神分析理論　現代精神分析双書第Ⅱ期　岩崎学術出版社)
山竹信二 (2011). 「認められたい」の正体――承認不安の時代――　講談社現代新書.
山本　晃 (2010). 青年期の心の発達――ブロスの青年期理論とその展開――　星和書店